３０．６．２９　ひだまりの会　でこぼこの会共催　青少年健全育成学習会**報告書**

<table>
<tr><td>講　座　名</td><td colspan="3">ふりーすぺーす・えん　ひだまりの会　でこぼこの会共催
青少年健全育成学習会</td></tr>
<tr><td>学習テーマ</td><td colspan="3">自由に遊ぶことで広がる世界</td></tr>
<tr><td>講師の職業</td><td>ネイチャーライター</td><td>講 師 名</td><td>野島智司</td></tr>
<tr><td>実　施　日</td><td>平成　30年　6月　29日（金曜日）</td><td rowspan="2">出席者数</td><td rowspan="2">会　員　4　人
登録ボランティア　3　人
一　般　15　人
合　計　22　人</td></tr>
<tr><td>実施時間</td><td>１９ 時 ００ 分 ～ ２１ 時 ３０ 分</td></tr>
<tr><td>会　場</td><td>下山門公民館</td><td>記 録 者</td><td>坂本房江</td></tr>
<tr><td rowspan="12">学習内容</td><td colspan="3">自己紹介：書籍　マイマイ計画とは？物心ついたころより好きなカタツムリをシンボルに、身近な自然と関りを紡ぐことをテーマとした活動。</td></tr>
<tr><td colspan="3">生い立ち：子供のころに学校に行かずにどう過ごしていたのか
東京から大分に引っ越し、小学校1年生から高校まで学校には行っていない。3歳と6歳上の兄がすでに学校に行ってなかった。学校には行っても行かなくても、自分で決めて良いという家庭だった。</td></tr>
<tr><td colspan="3">消しゴム人形。生い立ちを語るうえで不可欠。ガチャガチャ（当時20円）で購入。そのホゲ娘という人形で人形遊びをしていた。人形王国のお金や本や家を作っていた。</td></tr>
<tr><td colspan="3">家にはいろんな国の人が旅人としてうちに泊まりに来ていた。郵便屋さんと仲良くなり、コレクションの矢じりを見せてもらったりした。</td></tr>
<tr><td colspan="3">友達の数は多くないが、関係の深い友人がいた。自分のマイペースな性格は生まれつきか環境のせいなのかはわからない。</td></tr>
<tr><td colspan="3">家にPCがあり、プログラミングに凝っていた。分数の計算ができない頃からsine、cosineを使いプログラミングをしていた。</td></tr>
<tr><td colspan="3">勉強は中学1年生のテキストから始めた。大検合格、東京農大に合格。勉強についていけるか心配でまじめにやっていたら、奨学生に選ばれた。</td></tr>
<tr><td colspan="3">よく聞かれること；小さいころ一緒に遊ぶ友達はいたの？
幼馴染や不登校仲間がいた。家に来た人と交流はあった。</td></tr>
<tr><td colspan="3">大学に入ってから友達作りに苦労しなかった？
受験勉強中の東京生活では苦労した。大学時代は、いろんなところから来た人たちだったので、すんなりなじめた。</td></tr>
<tr><td colspan="3">子供時代はどうやって勉強を教わっていたの？
やりたいこと（プログラミング）をしたかったので、そこで必要な勉強は楽しく自分でやっていた。検・大学受験の際には「先生」が必要になった。
学校に行かなくてよかったと思っているか？
今の自分は学校に行ってなかったからこそ形成されたものである。
その後：学生生活から今まで</td></tr>
</table>

	卒業論文　アブラコウモリ　環境教育に関心が移り、北海道大学の大学院へ 自分がやりたいのは教育ではないことに気が付いた。北海道大学の社会教育の分野に移った。九大へ。研究者になることに違和感を覚える。 退学して、自宅ガレージを夕方から開放し「あそびらき」活動をスタート。工作したり、水遊びしたり子供たちと遊んでいる。 今思うこと： 自分にとっては、遊ぶことが好奇心を探求していくことで、それはすなわち学びである。勉強は学びの一手段に過ぎない。ほかに色々な学びがあると考えている。いろんな地域にいろんな居場所があるとよい。 学べる場所も学校だけでなく、ふらっといって学べる場所がたくさんあると良いと思う。

続いての座談会　参加者13人

・興味をもって勉強したのち、なぜ行き先が大学だったのか？
　　本の著者が大学の先生だったので、自分で大学にいけば好きな研究をできると思った。進学先も自分で調べた。
・保護者は不登校により子供に社会性が育たないことを一番心配している。社会性は日常生活の中で付けたという先生のお話を、お母さんたちに伝えられる。
・不登校あっての自分だということが響いた。
・どんな親御さんだったのか？
　　お父さんは声優野島昭生さん。　二人のお兄さんも声優。ご両親は干渉しない人たち。やりたいことをやらせてくれた。最初の兄の不登校の時は学校に行かせようとした。お兄さんが「自分が自分でなくなったしまう」と発言してからは、無理にいかせることをやめた。お母さんは、おとなになって考えたら個性的な性格。大分に引っ越した理由は、学校に行かせずに子供を育てるなら田舎がいいとお母さまが考えた。えんもゆかりもないところだった。両方のおいしいところを取って育った。仕事の拠点が東京にあった父親も大分に一緒に引っ越してきた。祖父は戦争で亡くなっているので、父の中には父としてのモデルがないのが幸いした。
・不登校という言葉でくくることに違和感がある。
・不登校に代わったポジティブな言葉があると良い。
・やりたいことをやるための勉強なのに、勉強が目的になっている。
・今好きなことを探して支援してあげることが大事。
・好きなことを見つけるためには、親からのしばりを解くこと。子供は親に心配をかけたくない。お互いの心配のループにはまる。
・ゲームをどう考えるか。ゲームはほかに楽しいことがあればやらないようである。逃げ場としてのゲームなのでは。
・ゲームは想定内のもの。想定外を体験させることが大事。現実のほうが全然面白。だからゲームはバーチャルリアリティに近づいている。
・学校がいつ来てもいつ帰ってもいいよという所なら、行ったかも。
・経済的・精神的に学校以外の道を模索できる家庭はいい。学校は一番安上がり。大多数の人にとって役に立つ良いシステム。不登校はマイノリティだから、立場が弱い。
・一人一人が学びたいことがあるときに、それを支えてくれる場所は多きほうがいい。
・小学生にも年休があっていい。

資料：講師hp
https://note.mu/maimaikeikaku/n/n33c3f4c1ea1c

不登校が普通だった。

by マイマイ計画

※２００９年ごろに描いたものを、一部改変しております。

※『妖怪大戦争』（大映、１９６８）ゆかりのキャラクターかと思われます

その国には、紙幣が流通し、会社が生まれたり、政党が作られたりしました。

ある日、兄のピロが、めずらしく仲間に加わり…

商売を始めました。

ピロが始めた宝くじは…

全国民が購入。

←行列づくり

ギャンブル好きな国民性を知って、

兄はたんまりお金をもうけると…

自分の部屋に戻って行きました。

その他、時には三人がかりでホゲ娘の映画を制作するなど、

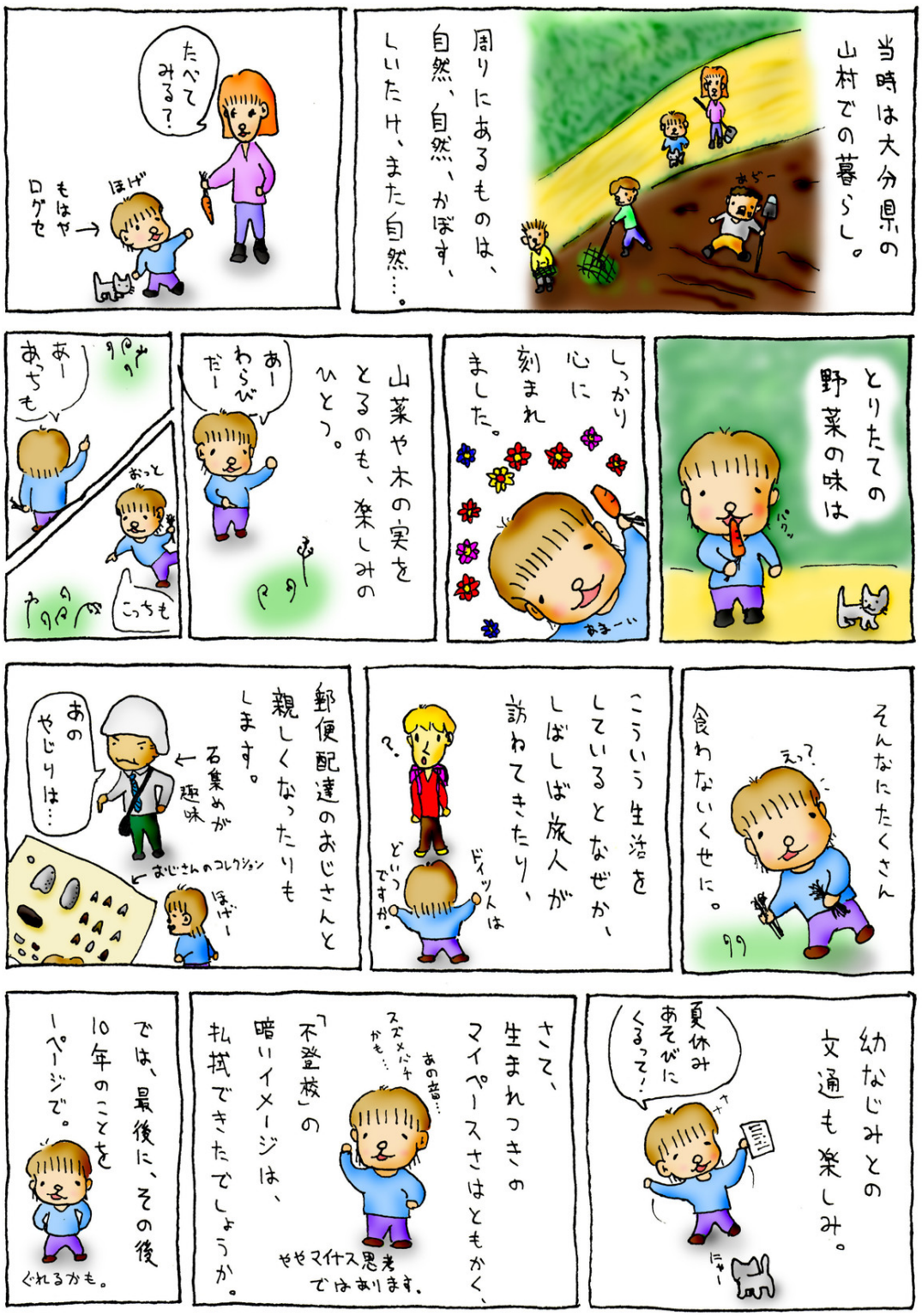
たいくつで困ることはありませんでした。

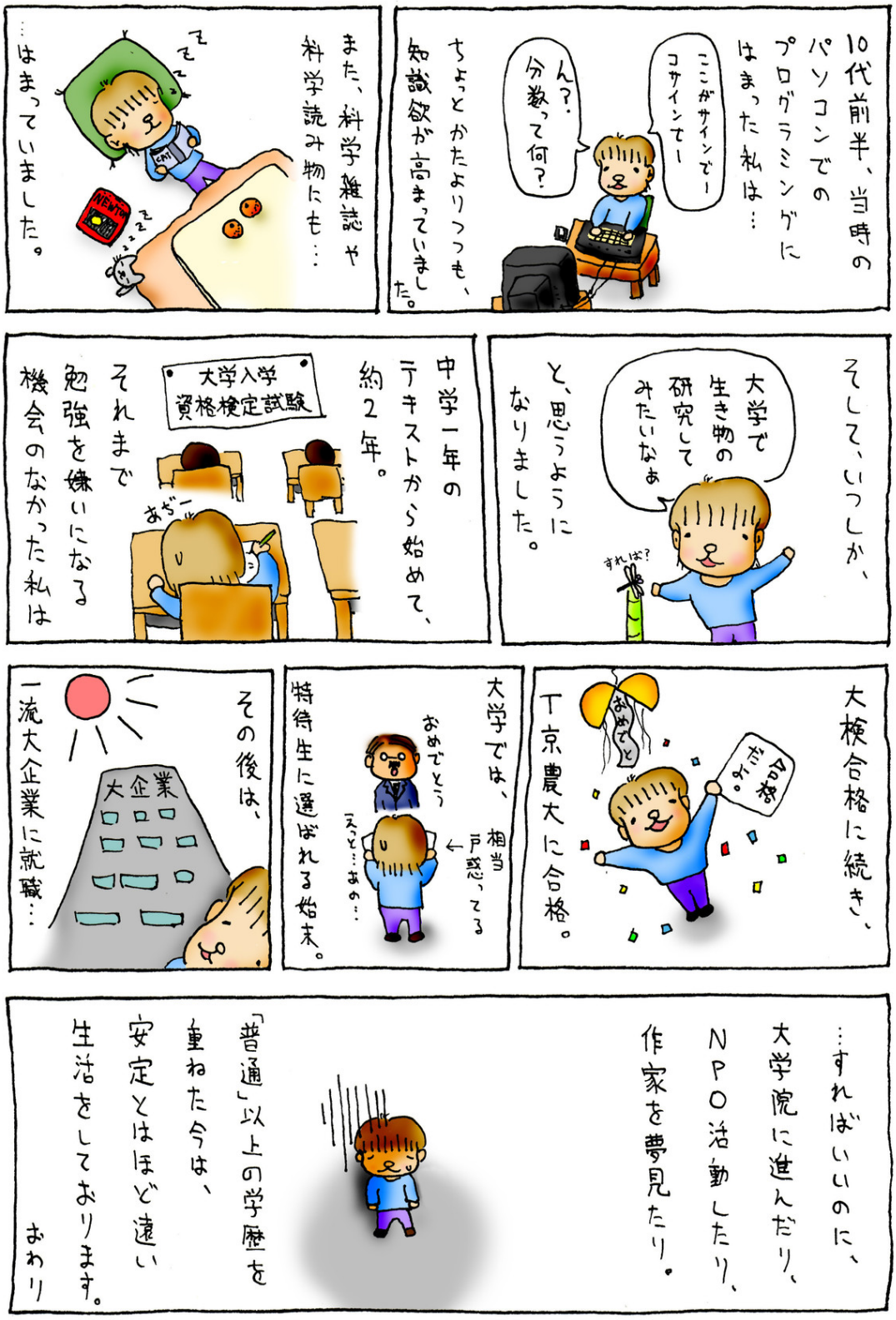
めったに帰除しないため、ホゲ娘が「行方不明」となることもしばしば。

なぜか、泥あそび中に発見されたことも…。

それから次に、

農作業のことも少し。


当時は大分県の山村での暮らし。
周りにあるものは、自然、自然、かぼす、しいたけ、また自然…。
たべてみる？
もはやロケセ
ほげ
とりたての野菜の味は
パクッ
しっかり心に刻まれました。
あまーい
山菜や木の実をとるのも、楽しみのひとつ。
あーわらびだー
あーあっちも
おっと
こっちも
そんなにたくさん食わないくせに。
えっ？
こういう生活をしているとなぜか、しばしば旅人が訪ねてきたり、
？
ドイツ人はどいつですか。
郵便配達のおじさんと親しくなったりもします。
あのやじりは…
石集めが趣味
おじさんのコレクション
ほげー
幼なじみとの文通も楽しみ。
夏休みあそびにくるって！
にゃー
さて、生まれつきのマイペースさはともかく、
あの音…スズメバチかも…
「不登校」の暗いイメージは、払拭できたでしょうか。
ややマイナス思考ではあります。
では、最後に、その後10年のことを一ページで。
ぐれるかも。



当時の生活の詳細や、大学入学以降のことについては、
野島智司著『マイマイ計画ブック　かたつむり生活入門』（ele-king books）をご覧ください。